鳴門教育大学予防教育より

新しい学校予防教育

―健康・適応から学業まで―

鳴門教育大学
予防教育科学
教育研究センター
所長 **山崎 勝之**

はじめに

鳴門教育大学に「予防教育科学教育研究センター」が設置されたことはご存知でしょうか。そして、文部科学省から五年にわたる計画で概算要求予算が認められ、昨年四月から、子どもの健康と適応を守る、新しい学校予防教育の開発と実践を開始したことをご存知でしょうか。

鳴門市教育委員会のご援助で、本年度の前期に鳴門市の複数の小・中学校で、開発した教育を実施させていただきました。そして、後期からは、附属小・中学校でその教育を継続しています。

子どもの健康や適応上の諸問題は、なかなか解決の糸口がつかめません。いじめや不登校は相変わらず多いし、生活習慣病予備軍の増加やうつ病になる子どもも珍しくなくなりました。こうした状況の中、健康や適応のために、ユニバーサル（一次的）な予防の必要性が叫ばれています。ユニバーサル予防とは、問題が起きないうちにすべての子どもを対象に行う予防です。

教育の中身

このセンターが行う教育は、トップ・セルフ「『いのちと友情』の学校予防教育」（TOP SELF：Trial Of Prevention School Education for Life and Friendship）と呼ばれ、二〇一〇年春から新聞紙上でも複数回紹介され、すでに気づかれている方も多いかもしれません。

このトップ・セルフの特徴は、①教育の目標と方法がエビデンス（科学的根拠）に支えられていること②すべての子どもをひきつける教育方法が考案されていること③評価は教育であるという主張を全面に出し、よい側面を強調した評価を子ども自身に戻していること等です。

トップ・セルフの規模は大きく、ベース総合教育とオプショナル教育から構成され、小・中学校のほとんどすべての学年で一年中実施できる構成と内容をもっています。ベース総合教育は、子どもの健康と適応を総合的に守り、問題を予防する教育で、常時適用されます。オプショナル教育は、学校のニーズに合わせて適用され、特定の問題に特化した教育です。そこでは、いじめ、暴力、非行、ストレス、うつ病、性関連問題、喫煙、薬物乱用等、一〇にも及ぶプログラムが用意されています。

世界の動向

社会・感情学習（SEL：Social Emotional Learning）という言葉を聞かれたことがあるでしょうか。今このSELが、アメリカを中心として世界の学校教育を席巻（せっけん）しつつあります。この教育では、感情面を中心に（認知も思考も含まれます）、対人関係の文脈（社会）で、心と行動を健全化します。そして、この教育は学業面でも好影響を与えることが証明されています。

トップ・セルフもこのSELの一種で、その効果は、健康・適応面のみならず、学業面にも及ぶことが期待されます。昨年、このSELのメッカである、シカゴのキャセル（CASEL）と呼ばれるセンターを訪問し、こちらの予防教育科学教育研究センターとキャセルが、連携機関として共同でこの教育を推進することになりました。

今、心理学や大脳生理学の分野では、感情の役割が注目されています。これまで考えられた以上に、感情は私たちの行動や健康面をコントロールしていることがわかってきました。また、その感情の多くは意識されないものであることもわかっています。その感情を健全に意識化させ、問題のある感情を効果的に処理することが健康や適応の基盤になりそうです。

これまでの授業との違い

トップ・セルフは、現場の先生には理解しにくい授業になっています。やり方は簡単なのですが、目標と目標から方法へのつながりを理解する機会が不足しているようです。その原因は、エビデンスをもって授業目的や方法を考える姿勢が学校教育には乏しかったこと、そして、これまでの教科の授業で子どもを教えるときとは、まったく違った考えかたで授業が成り立っているからです。

それは、トップ・セルフで教育対象とする心の特徴の形成過程が、単なる思考のゆがみからくるのではないからです。ここからの教育は、感情（意識にのぼらないものも含む）を中心に、認知や行動のあり方全般にかかわることになります。

総合的な学習の時間とPISA

今現在、トップ・セルフは小・中学校であれば、総合的な学習の時間で行うことが推奨されています。それは、トップ・セルフと総合的な学習の時間の目標がほぼ合致するからで、ただ時間があるからそこで行うということではありません。総合的な学習の時間が十分に行えていない現況をみると、トップ・セルフの適用がなおさら期待されます。

また、最近の日本の教育はPISA（国際学習到達度調査）の結果に神経質になっていますが、PISAが評価する力は、経済協力開発機構（OECD）の会議で決定された三つのキー・コンピテンシー（主要能力）、自律的に活動する力、異質な集団で交流する力、道具を相互作用的に用いる力のうち、最後の知的側面のコンピテンシーの評価になります。トップ・セルフで目指す二つの大目標（自律性と対人関係性）が残りのキー・コンピテンシーにほぼ合致することは偶然の一致ではなく、大切なものを追求した当然の結果でしょう。

今後の展開

さて、私たちの新しい教育は始まったばかりです。このような教育が、ある地域で軌道に乗って実施されるには最低三年かかると言われています。

軌道に乗せるには、地域の学校の協力が欠かせません。子どもにとって本当に必要な教育に迫るトップ・セルフの役割と効果を知っていただき、多くの学校教育者がこの教育を導入されることを願っています。

私たちも、この教育を理解いただくための努力は惜しみません。徳島県下の教員を対象とした最初の研修会もこの三月に開催する予定です。センターの活動は次のウェブ・サイトに詳しく載せていますのでご覧ください。

http://www.naruto-u.ac.jp/center/prevention/